中島川 寺町 おさんぽマップ

2024年1月発行/まちぶらプロジェクト

中島川・寺町『歳時』

1月 立春祭
2月 節分
3月 桃まつり
4月 花まつり
7月 七夕祭り
8月 川まつり(長崎夜市)
10月 栗名月季くんち
12月 冬至　除夜の鐘

中島川・寺町かいわいおさんぽMAP

…下記に紹介したお寺　…下記に紹介した町家

中島川・寺町かいわい見どころチェック！

眼鏡橋

中島川に架けられた石橋群の中でも水面に映る姿がめがねの形に見える眼鏡橋は、現存する日本最古の石橋として国の重要文化財に指定されています。橋の近くに造られた飛び石やハートストーンも人気です。

アルコア中通り

江戸中期から続く長崎で最も古い商店街で、昔は諏訪神社や寺町通りから続く門前町として栄えました。明治や大正時代から続く店も多い中、個性的な新しい店も誕生し、今と昔がいい感じで溶け合う、長崎の下町風情を楽しめます。

坂本龍馬ゆかりの地

坂本龍馬が日本初のカンパニーといわれる亀山社中を設立した亀山社中跡の建物は復元改修され、長崎市亀山社中記念館として龍馬ゆかりの品や書簡などを展示。龍馬がもたれかかっていたという柱も残っています。

記念館のすぐ近くにある「龍馬のぶーつ像」。眼下には長崎港が広がっています。

●本パンフレットについてのお問い合わせは、長崎市まちなか事業推進室（☎095-829-1178）

心がほっとする お寺めぐり

風情ある寺町通りには、国指定重要文化財の興福寺をはじめ貴重な仏像や幽霊の掛け軸がある寺院などが立ち並び、和と唐の文化が混在した長崎の歴史を感じさせてくれます。気軽に体験できる座禅や法座もあるので、ぜひ訪ねてみて！

01 光源寺

（浄土真宗本願寺派）
1631年（寛永8）開創
伊良林1-4-4
tel.095-823-5863

民話「産女の幽霊」の舞台として知られる寺。幽霊の木像や掛け軸もあり、毎年8月16日の公開日には多くの人が訪れます。毎週日曜日午前10時に日曜礼拝を開催しています。

02 禅林寺

（臨済宗妙心寺派）
1644年（正保元）開創
寺町7-14
tel.095-822-5583

禅寺として坐禅を通じ全ての人にお寺を開放。第1・3日曜7時～8時に坐禅会(1回500円)を開催。豊富な材料を使った精進料理(4000円～7000円・要予約)も楽しめます。

03 深崇寺

（浄土真宗本願寺派）
1615年（元和元）開創
寺町6-1
tel.095-822-2341

風格漂う山門や鐘鼓楼に歴史を感じる寺。1781年(天明元)に描かれたという三幅の地獄絵が有名で、毎年8月14・15の公開日には、遠方からも多くの人が訪れます。

04 三宝寺

（浄土宗）
1623年（元和9）開創
寺町5-22
tel.095-823-0775

大きく迫力のある表情のエンマ像は一見の価値あり。その右手にある像、別名「コンコン婆さん」は、「コンコン」と紙に書いて祈願すると、咳や喘息に効くと言われています。

05 浄安寺

（浄土宗）
1624年（寛永元）開創
寺町5-14
tel.095-823-2875

上部に梵鐘がある珍しい造りの山門。本堂の柱に施された、禍を吹き飛ばすような真っ白な獅子と龍の彫刻や、本堂の天井に掲げられた巨大なバラモン凧にも注目です。

06 興福寺

（黄檗宗）
1620年（元和6）開創
寺町4-32
tel.095-822-1076
8時～17時
拝観料300円

日本最古の唐寺で黄檗宗開祖隠元(いんげん)ゆかりの寺。国重要文化財の大雄宝殿(本堂)は必見。抹茶(お菓子付900円)ほか、こうふくまんじゅうやお守りも販売。

07 延命寺

（真言宗御室派）
1616年（元和2）開創
寺町3-1
tel.095-822-0378

入口の山門は、長崎奉行所立山役所の門を移築したもの。霊安堂に安置されている釈迦如来像も長崎奉行から送られた歴史ある仏像。病に悩む人が多く参拝する健康観音もあります。

08 長照寺

（日蓮宗）
1631年（寛永8）開創
寺町2-1
tel.095-822-1468

境内に鳥居がある珍しい寺。境内には「水徳浄行菩薩」があり、この菩薩様に水をかけて清め、治してほしい所と同じ場所をタワシで洗い流すと病が治るといわれています。

09 晧台寺

（曹洞宗）
1608年（慶長13）開創
寺町1-1
tel.095-823-7211

寺町で一番古い寺。県文化財の総門や山門、3.4mもの毘盧舎那仏坐像が安置された大仏殿など見応えたっぷり。歴史上の人物のお墓にも出合えます。坐禅会（毎土曜日19～20時。無料）も好評。御朱印可。

10 光永寺

（真宗大谷派）
1614年（慶長19）開創
桶屋町33
tel.095-822-1738
拝観は境内・本堂のみ

長崎県で唯一、朱印地様式の山門を持つ寺。福沢諭吉が蘭学の勉強の拠点として1年間滞在したことや、明治12年に初の長崎県議会が開かれたことでも有名です。

お寺めぐりのあとは 町家を訪ねてみませんか？

明治から大正期にかけては「町家の都市」といわれた長崎。ずいぶん少なくなりましたが、中島川・寺町地区には今も風情ある町家が点在しています。散歩の途中に気軽に立ち寄れるお店やカフェもありますよ！

01 鯛政寿司

麹屋町2-11
☎095-823-5354
12時～14時30分、17時～21時30分
水曜休

昭和初期に建てられた町家を利用した寿司店。カウンターの前の小さな蛇口や狭い階段、薪入れ用の引き出しなど、昔ながらの町家の特徴が残されています。

02 料亭 一力

諏訪町8-20
☎095-824-0226(要予約)
11時30分～14時、17時～22時
不定休

創業文化10年(1813)。長崎伝統の卓袱料理がいただけます(要予約)。現在の町家づくりの建物は大正6年(1917)築で、珍しい木造4階建てです。

03 馬場骨董品店

諏訪町9-3
☎095-823-5226
9時～19時
不定休

およそ90年前の町家(商家)を活用した店舗には、年代物の陶器から、手頃なお値段の昔懐かしい古道具や食器まで、思わず手に取る骨董品がいっぱい。

04 岩永梅寿軒

諏訪町7-1
☎095-822-0977
10時～16時
不定休

創業天保元年(1830)の歴史ある和菓子とカステラの店。カステラは手作りで数に限りがあるため、確実に買いたい時は予約を。桃の節句の時期には桃カステラもあり。

INDIES ART CLUB & GALLERY 05

東古川町2-6
☎095-823-5217
12時～22時
金曜休(不定休)

築100年以上の町家を利用したアートギャラリー。オールジャンルの作家の作品を企画展示しています。

06 南蛮茶屋

東古川町1-1
☎095-823-9084
14時～21時30分
無休

江戸時代末期の古民家を改築した昔ながらの喫茶店。コーヒーが「南蛮茶」と呼ばれていた時代を彷彿とさせるアンティークな店内で、おいしいコーヒーがいただけます。

「町家」って何？

長崎の一般的な町家は、格子や連子（れんじ）、裏の家へ続く小路などがある純和風木造住宅。京都などにある町家よりも間口が狭く奥に長いため、敷地の中に庭をつくって光や風通しを良くしていました。くんちの庭見せで使われる「見せの間」があるのも長崎らしい造りのひとつ。2階の連子（窓に取り付けられた腰掛けできる手すり）から、くんちの庭先回りを楽しんでいたようです。

長崎 まちのなりたち

開港によって発展した長崎の町「寛文の大火」に見舞われたあとの復興事業において新市街が造られ、町並みの原型ができあがった

長い岬の上に初めての町

長崎はその昔、「瑒（たま）ノ浦」や「深江浦」などと呼ばれ、長崎氏という豪族が支配していました。長崎氏は現在の桜馬場中学校の地に館を構えていたので、その一帯には小さな城下町が築かれ、そこから海に向かって長い岬がありました。この「長い岬」は「長んか岬」などと呼ばれ、それが「長崎」の地名になったともいわれています。

元亀元年（1570）の開港の翌年から、大村藩主大村純忠の命により、この長い岬の台地の上に「町建て」が行われ、6町（大村町、嶋原町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、文知町）が形成されました。

内町・外町の誕生

（図1）「寛永長崎港図」（長崎歴史文化博物館所蔵）

天正8年（1580）、長崎は茂木・浦上とともにイエズス会に寄進されキリスト教の町として教会などが建ち並んでいました。しかし、天正15年（1587）豊臣秀吉が伴天連追放令を発し、長崎等の地を没収し、直轄地としました。このとき、秀吉は当時10町ほどに増えていた町の地租（土地税）を免除したので、これらの町は「内町」と呼ばれました（図1の白色部分）。文禄元年（1592）には23町となり、長崎奉行により支配されることになりました。1597（慶長2）年には、市街は中島川沿いに広がり、これ以降の町は「外町」と呼ばれ（図1の赤色部分）、長崎代官に支配されることになりました。

寛文の大火と都市計画

ところが、寛文3年（1663）、「寛文の大火」で総町66町のうち57町、家数2900戸を焼失してしまいます。幕府はこの長崎始まって以来の大火災の復興に着手。その際、道幅を本通り4間（8m）横町3間（6m）、溝幅を1尺5寸（45cm）に定めて新市街をつくりあげました。この事業は、寛文12年（1672）にほぼ一段落し、今日の起源と考えられる内町26町、外町54町の総町80町となり、幕末までつづきました。その後の新たな都市計画等で部分的な変更はあるものの、現在でも旧市街、特に寺町・中通り界隈には、その町並みが残されています。

敷地割と町名の由来

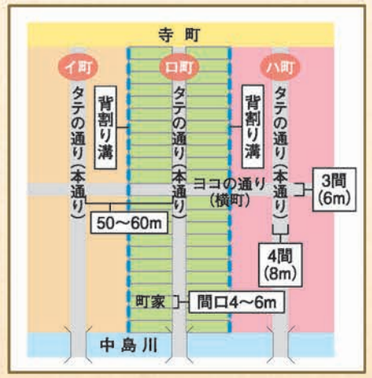
長崎の町並みは、通りに名前が付けられ、両側に町家が並び、同じ通りの両側の地域がひとつの町を形成している「両側町」が特徴です。

主な通りは中島川とほぼ直角に交わるタテの通り（本通り）と、それらをつなぐヨコの通り（横町）で構成されています。タテの通りの間は50～60mあり、これを背割りで2分し、タテの通りを挟んで向かい合った数十戸が一つの町を構成していました（図3）。町の名前は変わったものの、町割りは現在でも残っており、ししとき川沿いからは、今も東古川町と銀屋町の町境の背割り溝を見ることができます。

町名は大きく分けると、住民の出身地、町に多かった職業、地理的な位置、年代によって付けられ、内町は出身地に由来する名前が多かったようです。一方、外町は職業に由来する町名が多く、中島川沿いの染物や紙すきの職人町は、紺屋町、紙屋町などの町名がありました（写真1参照）。

その後の町名変更等で懐かしい町名が変わってしまったり、消えてしまったものもありますが、今も、通りや橋名などにその名残があるほか、銀屋町や東古川町など町名復活した町もあります。また、くんちの踊町など、コミュニティは現在にも受け継がれています。

編笠橋のたもとで紙すきをする風景。江戸時代はじめに中島川沿いに紙すき職人が多く住み着いたため「本紙屋町」という町名がついたといわれる（写真1：長崎大学附属図書館蔵）



（図3）町を構成する通りと敷地

長崎は他にはない町家の都市だった

幕末明治期の長崎は、町家の建物がびっしりと建ち並び、大正初期の「日本都市風景」（橡内吉胤：とちないよしたね著）に「長崎のように同じような古風な格子の家の集団が果てしなく続く風景は見たことがない…」という記述があるほど、その光景は珍しいものだったようです。長崎の一般的な町家は、格子や連子（れんじ）、裏の家へ続く小路（しゅうじ）などがある純和風木造住宅。間口が狭く奥に長いため、敷地の中に庭を作って光や風通しを良くしていました。昔のように連続した町家の並びこそないものの、長崎市内には今も約300軒余りの町家が残っています。

町家が建ち並ぶ風景（明治中期以降）。諏訪町の通りを寺町（長照寺）方向に向かって撮影（写真2：長崎大学附属図書館蔵）

今も残る町のかたち ～寺町・中通り～

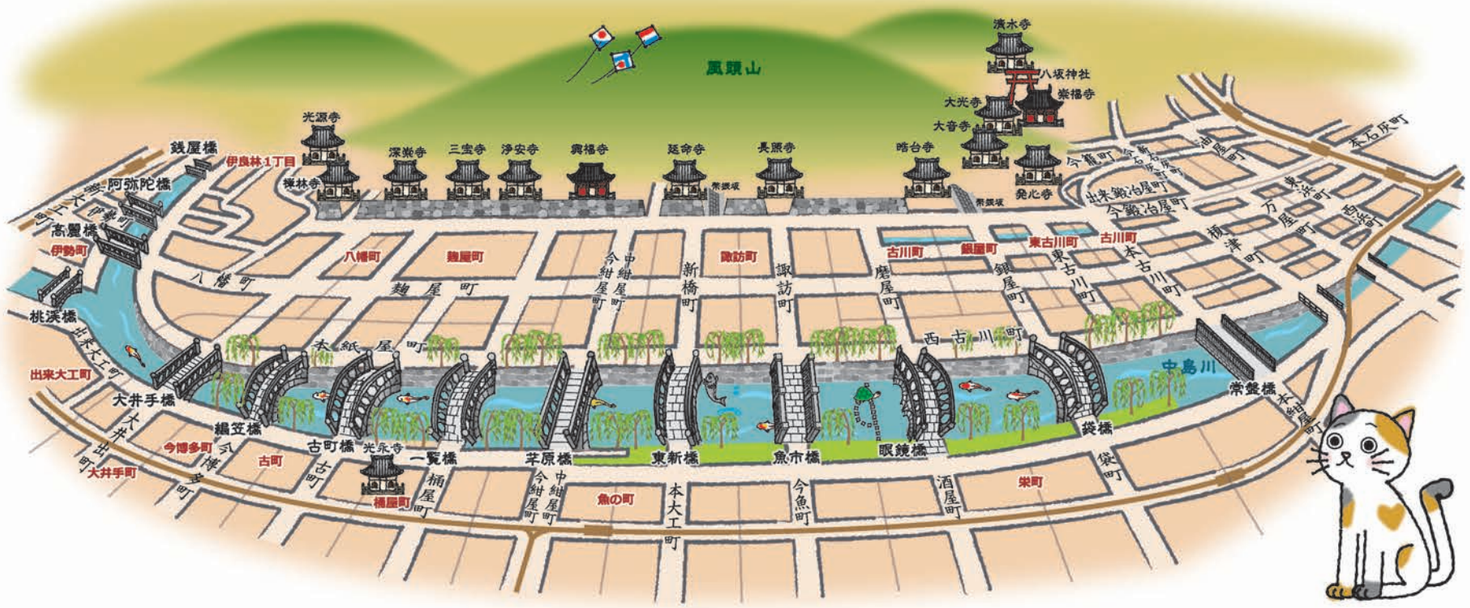
寺院、神社へと続く道が、商店街として発展

長崎の都市は内町から始まり、その外側に外町が造られ、周辺に寺社群が形成されてきました。内町は細長く周囲に石垣が築造され、諏訪神社下から西役所（現在の県庁跡地）にいたる道路は、公的なメインストリートとなりました。そこから伸びた外町の街路は、ほぼその骨格を現在に残し、中島川沿いに商家群、風頭山のふもとに寺社群が形成され、それをつなぐように橋が架けられました。

寛永2年（1625年）に、諏訪、森崎、住吉の三社が諏訪神社として合祀された事から、諏訪神社へ参拝する為の道は商店街として発展していきました。

眼鏡橋を興福寺の住職が造ったことからもわかるように、中島川に架かる石橋は参拝客のために造られました。その門前町として形成され発展してきた現在の中通り商店街は、長崎で一番古い商店街です。

（図2）享和元年（1801）の長崎図　（長崎歴史文化博物館所蔵）
諏訪神社下から西役所にいたるメインストリートから外町に骨格が伸び、寺社群が縫どるように建つ。
地図には旧町名と町の境界線が書かれている



現在の寺町・中島川周辺の地図に、左の享和元年の長崎図に書かれている旧町名をイラストにしてみました。
赤字は現在の町名です。敷地割りはほぼ当時のまま。町名の中には今も残っているものもあります。